連載

市長室からこんにちは

vol.79

益田市長
山本 浩章

新しい年度の始まる季節になりました。新年度の行事が数ある中で、入学式ほど、厳粛な中にも胸おどる儀式はないのではないでしょうか。

入学すると日々通う校舎が変わり、教室で顔を合わせる同級生の顔ぶれも一変します。授業がさらに難度を増すと考えるだけで、ご指導くださる先生方の顔つきもどこかいかめしく見えてなりません。何よりも、すべてを「一年生」として迎える初々しさは、他のどんな人生の節目にも増して新鮮です。私などは学校というものを卒業してずいぶん経ってからも、夢に入学の日の様子が浮かんできたことが何度かあったものでした。

日本では桜の咲く頃に行われることが、入学式をより清新なものにしているように思います。しかし、この4月入学は世界の中では少数派で、もっとも多いのが、アメリカ、カナダ、イギリス、フランス、ロシア、トルコ、モンゴル、中国などで採用されている9月入学だそうです。

江戸時代には武士の藩校も庶民の寺子屋も、めいめいが好きなときに入学できたようです。明治になり学校制度が始まると、当初は西洋にならい9月入学が主流でしたが、その後政府が予算制度を創設する際、4月から始まる会計年度を定めると、学校もこれに合わせて徐々に4月始まりに移行していきました。当時の歳入が前年のコメの収穫高に左右されたため、その確定を待って予算編成を行うとなると、1月からの開始には間に合わなかったというのが理由のようです。ほぼすべての学校が4月入学となったのは大正時代のこととされています。

「国際標準」とは離れてしまっている日本の春入学ですが、今ではすっかり定着してしまっていて、変更はなかなか難しいようです。数年前に、東京大学が秋入学に切り替える方針を打ち出したものの、様々な困難に直面し、事実上の断念に落ち着いたという一幕もありました。

ともあれ、入学された方をはじめ新学期を迎えられたすべての皆さんにとって、幸先の良い春となることをお祈りします。

中世益田講座「益田氏 VS 吉見氏」（全７回）

第１回　益田氏最大のライバル吉見氏

【問い合わせ先】市文化財課　☎31-0623

中世（平安時代末から安土桃山時代まで）の石見で最も有力な領主は現在の益田を中心とする地域を治めた益田氏でしたが、その最大のライバルともいうべき存在が、現在の津和野町・吉賀町のあたりを治めた吉見氏でした。

益田氏と吉見氏は、ライバルというより、むしろ仇敵と表現した方がよいくらい険悪な関係で、何度も戦っていました。

益田氏と吉見氏の険悪な関係は、様々な人々を巻き込みました。中央政権である室町幕府、地方権力である大名の大内氏や毛利氏なども、両氏の険悪な関係に頭を悩ませましたし、大内氏から毛利氏へと中国地方の覇権が移る大きな歴史的画期にも両氏の対立が影響を与えました。また、両氏の勢力がせめぎ合う地域では、いつ戦闘が始まるかわからず、地域の人々は必死に智恵をしぼって、生き残りをかけることになりました。

一方で、益田氏・吉見氏はともに高い文化性や交易への関心を示しました。それは石見のみならず、日本の中世を代表するような水準にあり、そのことを示す文化財が残っています。

益田氏と吉見氏の対立の歴史、特に何をめぐって争っていたのかを分析することで、両氏の基本的な性格がよりはっきりとしてきますし、また、石見という地域の歴史的・地域的特質が見えてきます。

今年の秋には、両氏の歴史と文化を紹介する特別展「益田氏VS吉見氏―石見の戦国時代―」が県立石見美術館で開催される予定です。本連載はその予告編として、益田氏と吉見氏の対立の歴史を紹介します。

右：益田家の家紋「上り藤に『久』」
左：吉見家の家紋「二両引き」